

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 26 日現在

機関番号：24301

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520176

研究課題名(和文)中央・西アジア音楽文化の比較研究2 - ウイグルとトルコ・イランの伝統を中心に

研究課題名(英文)A Comparative Study on the Central and West Asia Music Culture 2 : Focused on the Traditions of the Uighurs, Turkey, and Iran

研究代表者

龍村 あや子 (TATSUMURA, AYAKO)

京都市立芸術大学・音楽学部・教授

研究者番号：40207064

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円、(間接経費) 1,020,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は新疆ウイグル自治区のウイグル人作曲家、ウメル・マーマットを主たるインフォーマントとして、比較文化・文明の観点から中央・西アジア音楽研究に携わってきた研究代表者(龍村)が、トルコ(小柴はるみ)、イラン(谷正人)、アラブ(屋山久美子)の音楽研究者と共に、トルコ語系民族のウイグルと他の中央・西アジア地域の音楽との比較を行ったものである。今日の伝承におけるウイグルの「ムカーム」は、他の地域の伝統よりも固定性が強く、各ムカームが固有の旋法のみならず、固有のリズムと舞踊の様式を持っている。ムカームに基づく一人の奏者の即興演奏も見られるが、音楽・舞踊の一体化した全体が一つのムカームの表現なのである。

研究成果の概要(英文)：This was a comparative study on the traditional music cultures in the Central and West Asian Countries, focused on the culture of Uyghurs, a Turkish group of people living in the Xinjiang Autonomous Region in China. Ayako Tatsumura was the representative of this group and the main informant was Umer Mahmat, an Uyghur Composer. The study group includes three members of the experts of the music cultures of Turkey (Harumi Koshiba), Iran (Masato Tani) and the Arabs (Kumiko Yayama). Compared with other Makam traditions, the Mukam of the Uyghurs shows more fixability, and each Mukam has not only the characteristic melodic modes, but also the characteristic rhythm and dance. The improvisation based on the modes of the Mukam is possible. Furthermore, a unity of the music and dance is actually the whole of the expression of a Mukam.

研究分野：芸術学 / 芸術学・芸術史・芸術一般

科研費の分科・細目：音楽学

キーワード：ウイグル 中華人民共和国 音楽 少数民族 中央・西アジア イスラーム トルコ語系 民族芸術

1. 研究開始当初の背景:

本研究は、トルコ語系民族であるウイグル出身の作曲家、ウメル・マーマット氏(現在、新疆芸術学院音楽学部准教授)が、研究代表者の龍村の指導のもとに博士論文を書いたことをきっかけに、以前より比較文化・文明の観点から中央アジア・西アジア研究にも携わってきた研究代表者が、アラブ(屋山久美子・ヘブライ大学日本語非常勤講師)、イラン(谷正人・神戸大学大学院人間発達環境学研究所 准教授)、トルコ(小柴はるみ・東海大学名誉教授)のそれぞれの地域の音楽研究者を連携研究者及び研究協力者として迎え、これらの地域の伝統音楽の比較研究を意図したものであった。また本研究は、2008年から2010年にかけて科学研究費基盤研究Cの援助を受けて行った「中央・西アジア音楽文化の比較研究 ウイグルの〈ムカーム〉を中心に」の直接的な継続として企図したものであった。

2. 研究の目的:

(1)イラン、トルコ、アラブの文化に共通しているのは、それぞれの文化において、伝統的に伝えられてきた旋法とリズムの体系があり、その伝統に基づいて、人々が即興的に奏者独自の演奏を繰り広げる、という在り方である。トルコやアラブではこの基本となる旋法を「マカーム」と呼び、イランでは「ダストガー」、そしてウイグルでは「ムカーム」と呼ぶ。筆者が以前から研究の対象として親しんできたイランの伝統では、ダストガーに基づく個人の演奏家の即興演奏が重んじられ、神秘主義の影響を受けた古典詩に基づく歌唱が有名である。今回の研究の主な目的は、トルコ語系民族であり、また中華人民共和国という漢民族が支配的な国家に居住するウイグル人のムカーム演奏の実態が、上記の他の地域の音楽と比べてどのような特色を持っているか、ということをも明らかにすることにある。

(2)ウイグルがトルコ語系民族であることは、私たち研究者は知っていても、ウイグルの一般の人々は意識していないのが普通である。また中華人民共和国にあってウイグルの人々は、自分たちの存在そのもの、さらには自分たちの文化、音楽が、非常に特殊なものだというように感じている。ウイグルの人々にとって音楽表現とはどういう意味を持っているのか、という点について、ある程度明確にしたいというのがこの研究の更なる目的であった。研究代表者の龍村はすでに2009年に、「中央・西アジア音楽文化の比較研究に向けて—ウイグルの伝統を中心に—」という論文を民族芸術学会の機関誌『民族芸術』vol.15に発表しており、ウイグルの文化と音楽に関する概要については把握しているので、今回の研究についてはさらに、彼らの伝統が他の中央・西アジアの音楽文化と比べてどのような特色があるのか、また彼らが中国の新疆地域で生活しているということと、彼らの舞踊や音楽の実態との間にはどのような関係、意味内容があるのか、というようなことについても研究を行いたいと考えた。

3. 研究の方法:

今回の研究の中心となったのは、2012年9月12日から22日まで、研究グループの全員で行った新疆ウイグル自治区におけるフィールド調査であった。ウルムチ、トルファン、ピチャンの各地を訪問し、新疆各地に存在する伝統音楽の実態、楽器店などの在り様、新疆芸術民族楽団、新疆ムカーム芸術団、新疆芸術学院等の訪問により、実際に行われている音楽・舞踊の演奏の実態の調査と映像収録、また音楽・舞踊の教育の実態調査を行った。以下が収録した主な楽曲である。

(1) 新疆民族楽団

- ・ウツシャク・ムカームの テーゼ
- ・《モダン・ハヌム》《カシュガイ》

(2) 新疆ムカーム芸術団

- ・ウツシャク・ムカーム、チャビヤット・ムカーム

(3) 新疆芸術学院

- ・チャビヤット・ムカーム、ウツシャク・ムカーム
- ・ハミ、アトシュ、カシュガル、トルファンなどの民謡
- ・ギジエクやレワブなど弦楽器の独奏、
- ・ネイ(葦笛)の独奏、
- ・チャビヤット・ムカームの合奏など

(4) ピチャン・ローラン歌舞団

- ・ウセック・ニムペデ(最初に演奏する曲)
- ・イリの民謡5曲
- ・トルファン民謡4曲
- ・〈ワダリハ〉(楽曲名)

また京都市立芸術大学においてその後、研究会を催し、討論を行った。さらに比較研究の観点から、東京在住のキルギスタンの音楽・舞踊の研究者を京都市立芸術大学に招き、演奏と舞踊の公開研究発表会を行った。最終年度の最後に研究代表者は、中華人民共和国との比較において、台湾における少数民族の音楽文化の実態と国家によるその扱われ方を知るために、台北における3日間の調査を行った。

4. 研究成果:

(1)2012年9月の新疆ウイグル自治区のフィールド調査により、この地域における音楽・舞踊の教育の実態を知ることが出来た。新疆には、音楽のみならず、舞踊を教える学校制度もあり、音楽・舞踊の教育がこの地域では非常に重視されていることがうかがわれた。また今日ではこの地方にしか見られない西アジア系の古いタイプの珍しい撥弦楽器(カールン)の演奏を収録する成果を得た。さらに研究会を実施することにより、イラン、トルコ、アラブそれぞれの音楽の特色とウイグルの音楽の特色との比較考察を行うことが出来た。ウイグルの特色は、旋法の体系が「十二ムカーム」という名称で固定され、さらにそれぞれのムカームに、歌と舞踊の様式が形成されているということである。この実態は、ウイグル人の居住する地域が、いわゆるシ

ルクロード観光の重要拠点であることと少なからず関係があると考えられる。すなわち、音楽や舞踊が、いにしへの「西域の舞」とその音楽を連想させるような表現芸術として、この地の観光の場で必要とされており、そこで披露される華やかな演舞が、また現実にウイグルの人々にとっての重要な生活の糧となっている、ということと大いに関係があると考えられる。



図1 ウイグルの舞踊



図2 ウイグルの楽器工房



図3 アラブのウードの演奏

(2) 今日、ウイグルの人々は、中華人民共和国政府の「西部開発計画」による漢民族の西部への大

移動に伴い、自分たちが長年生活を営んできた地での生活がおびやかされるのではないかという、大きな不安を抱えている。ウイグル人のほとんどが敬虔なイスラーム教徒であるという事実、また食生活や風習も漢民族とは異なるという事実が、漢民族が中心となっている国家における少数民族としての彼らの生を生きづらいものとしていることは事実である。研究者としてはこうした事態にも大きな注意を払って行くべきである、ということが実感できた。



図4 羊を追うウイグルの少年

(3) 研究者にとって、研究成果とは、論文を書き、その成果を社会に還元することに他ならないと研究代表者は考えている。現在、3年間の研究成果に基づく論文集を作成中である。小柴、屋山、谷、ウメルの各氏からはそれぞれすでに論文の原稿を提出いただいた。研究代表者自身の論文と合わせてできる限り早く出版したいと考えている。研究代表者としては、できれば出版のための助成金に応募して、この研究に一応の区切りを付けたいと考えている。概要は以下のとおりである。

題名:『中央・西アジアの音の表現 アラブ・イラン・トルコ・ウイグルの伝統を中心に』

はじめに

- 1) イスラーム文化圏の音文化の理解のために (龍村あや子)
- 2) 2012 夏 新疆ウイグル調査の行動表と収録資料(小柴はるみ)

本論

・イスラーム文化圏の音楽表現の多様性と類似性 中華人民共和国の回族・ウイグル族から北アフリカのイスラーム文化圏まで(龍村あや子)

概要: イスラームの優勢な文化は、中華人民共和国の西安付近に居住する回族と、新疆ウイグル自治区に居住するトルコ語系のウイグル族の文化から、西は北アフリカの各地域にまで広がっている。この研究グループにおいては、ウイグル人のウメルル・マーマット(研究協力者)を主たるインフォーマントとして、さらにトルコの伝統音楽を長年研究している小柴はるみ(研究協力者)、イラン古典音楽の研究・演奏家である谷正人(連携研究者)、そしてヘブライ大学で教えるアラブ音楽研究家の屋山

久美子(研究協力者)の3人の地域研究者を研究協力者として加え、共同研究を行ってきた。

・ウイグルの伝統における音、音楽、舞踊の現在(ウメル・マーマツト、龍村あや子)(原稿校正中)

研究代表者の龍村はすでに2009年に、「中央・西アジア音楽文化の比較研究に向けて—ウイグルの伝統を中心に」という論文を民族芸術学会の機関誌『民族芸術』vol.15に発表しており、ウイグルの文化と音楽に関する概要については把握しているので、今回の研究においてはさらに、彼らの伝統が他の中央・西アジアの音楽文化と比べてどのような特色があるのか、また彼らが中国の新疆地域で生活している、ということとの関連において、彼らの舞踊や音楽がどのような意味があるのか、について考察した。2013年度までの研究によって、筆者自身にとりわけ明確となったと考えられることをまとめると以下のようになる。

1) ウイグルの人々にとって、音楽や舞踊は単に自分たちのアイデンティティの表現としての文化であるばかりではなく、重要な観光資源でもあり、中華人民共和国に属するこの地において、固有の文化を保持し、主張しつつ生きてゆくための、重要な生活の糧であり、「心のよすが」でもある。近年の中華人民共和国政府の「西部大開発計画」により、漢民族がこの地に次第に押し寄せるといった現実の中において、イスラームの信仰を持つトルコ語系のウイグルの人々は、自分たちの生活と伝統が圧迫され、脅かされるのではないかという危機意識を抱いている。

2) ウイグル人は意識してはいないが、ウイグルの音楽文化は西アジアの伝統、とりわけトルコの伝統と密接な関係がある。言語はむろんのこと、楽器の種類などにも西アジアの伝統と共通するものが多い。

3) ウイグル人の音楽行動は、彼らの強い民族意識と深く関係している。中華人民共和国において固有の伝統を長く保持してきた少数民族としての自意識が、彼らの強い音楽表現を維持させている。「民族のアイデンティティの主張としての音楽・舞踊表現」という在り方が非常に重要なものとして今日も確固として存在しているのである。

4) 他方で、さらにウイグルの音楽・舞踊の表現の在り方と切り離せないのは、「シルクロードの音楽舞踊」という、この地に対して外側から求められるエンターテインメントとしての要素である。伝統的な音楽舞踊が、非常に質の高いものとして観光客にも披露され、それは彼ら自身の誇りでもありと同時に、重要な経済資源ともなっている。こうした観点から、「観光と音楽」という観点からの更なる研究も可能であると考えられる。以下は論文集の概要である

- ・トルコとウイグルの伝統楽器と演奏表現
ドタールを中心に
- ・ウメル・マーマツト「ウイグル族の楽器ドタール(Duttar)とその演奏法について」(原稿受領済み)
- ・小柴はるみ「中央アジアの2弦の撥弦楽器考

ウイグル族のドタールを中心に」

概要：以上2論文は、ウイグル人にとって最も身近なドタールという楽器の構造と奏法についての論稿
(原稿受領済み)

- ・イラン伝統音楽の演奏の実践と表現法
(谷 正人)(原稿受領済み)
概要：イランの主要な古典音楽の楽器、サントウールを中心に、即興演奏の在り方を考えた論稿
- ・中央・西アジアの音楽文化圏におけるマカームの旋法原理と特徴 東アラブにおける「マカーム・ラースト」とウイグルの十二ムカームの「ラック・ムカーム」の比較研究
(屋山 久美子)(原稿受領済み)
概要：アラブ音楽の研究者として、東アラブのマカームの演奏実践と、ウイグルを中心とする中央・西アジアのマカーム、ムカームと呼ばれる音楽の演奏実践を比較研究した論稿

おわりに—中央・西アジア音楽の比較研究から見えてくること(龍村)

概要：中央・西アジアにおいては、それぞれの伝統のなかで今日まで伝承されてきた、「マカーム」(アラブ、トルコ)、「ムカーム」(ウイグル)「ダストガー」(イラン)と呼ばれる旋法の体系がある。音楽の中心にあるのは、伝統的な旋法の中から、演奏の場にふさわしいと思われる音階を選んで奏される、奏者の即興を含む演奏の実践である。特に独奏の際には、転調も行われることが多い。ウイグルの場合にはこの旋法が、「十二ムカーム」として整理され、そのそれぞれの音楽を伴奏に、独特の舞踊が演じられることもある。ムカーム演奏が合奏として演じられることが多く、したがってかなりの固定性があること、舞踊を伴う合奏としても演じられることは、中央・西アジア文化圏におけるウイグル文化の特色とも言える。この特色は、観光の場で演じられることの多いウイグルの音楽舞踊の在り方と結びついていると考えられる。

5. 主な発表論文等
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計8件)

ウメル・マーマツト(研究協力者)
「ウイグル族のドタール(Duttar)とその演奏法について」2014(予定)

龍村あや子
「イスラームの音文化」『比較文明学会会報』2014(印刷中)

Harumi KOSHIBA(研究協力者),2014 “The Pictures of Bells in two Saray Albums (Hazine 2153 and Hazine 2160)

龍村あや子,「三大世界宗教と音の表現」,『音楽学』,査読有,58-2巻,2012,pp.138-139

龍村あや子,「日本音楽学会第63回全国大会記録」,『音楽学』,査読有,58-2巻,2012,pp.155-155

龍村あや子,「アジアにおける芸術の独創的展開」, *Report of The Art Summit Tokyo*, 2012, pp.不明

Ayako TATSUMURA, "Music and Identity of the Minorities: The Case of the Uyghurs in China", *Report of the World Congress of International Musicological Society 2012*, 2012, pp.不明

龍村あや子,「第124回研究例会報告」,『民族芸術学会会報』,査読有,1巻,2011,pp.6-7

〔学会発表〕(計7件)

「イスラームの音文化」龍村あや子(研究代表者)片倉もとこ先生追悼講演 比較文明学会 2014

龍村あや子,「オープニングシンポジウム 三大世界宗教と音の表現」,日本音楽学会第63回全国大会,2012年11月24日,西本願寺聞法会館

龍村あや子,「アジアにおける芸術の独創的展開」,東京藝術大学主催国際会議:アジアのアーティスト・サミット,2012年10月10日,東京藝術大学

Ayako TATSUMURA, "Music and identity of the minorities: The case of Uyghurs in China", *Music and Cultures Identities: International Musicological Society 19th Congress in Roma*, 2012.7.6, Auditorium Parco della Musica, Roma

龍村あや子,「音楽に見るヨーロッパ文化と西アジア・イスラーム文化」,西洋中世学会,2011年6月26日,京都大学法経第7教室

Ayako TATSUMURA, "Music and Dance of Minorities: Ainus in Japan", *International Musicological Society East Asian Congress*, 2011.9.16-18, Seoul National University

龍村あや子,「アドルノ哲学に見る<自然>と<自然支配>の弁証法の問題とその今日的意義」,比較文明学会第29回大会,2011年11月20日,中央大学理工学部後楽園キャンパス

〔図書〕(計4件)

屋山久美子,「西アジア・中央アジアの音楽文化圏におけるマカームの旋法原理と特徴: 東アラブにおけるラースト・ムカームとウイグルの十二ムカームのラック・ムカームに見る共有点と差異」, "The Tawshih Tradition in the Aleppo-Jerusalem Liturgical Poetry of the Twentieth Century and the Beginning of the Twenty-First", *Aleppo Studies: The Jews of Aleppo 2*, ed. by Y.T.Assis, M.Frenkel, Y.Harel, Jerusalem, 2013, pp.191-204

Kumiko YAYAMA, "Arabic, Turkish and other Tunes as Markers of Openness and Dynamism among *Bakkashot* Singers of Jerusalem in the Twentieth Century" ed. by E.Avitsur, M.Ritzarev and E.Seroussi, Bar-Ilan Univ. Press Ramat Gan, pp.187-201

Masato TANI, ed. by Hiroko NAGASAKI, Saujanya Books, "Indian and Persian prosody and recitation" *Verbal Rhythm and Musical Rhythm: A Case Study of Iranian traditional Music*, 2012

龍村あや子,音楽之友社,「魔笛のザラストロはどこからきたか」『新 モーツァルティアーナ: 海老澤敏先生傘寿記念論文集』,2011, pp.403-417

〔産業財産権〕(該当なし)

〔その他〕ホームページ等

連絡先: tatumura@kcu.ac.jp

6. 研究組織

(1) 研究代表者

龍村あや子 (TATSUMURA Ayako)
京都市立芸術大学 音楽学部・大学院音楽研究科
教授
研究者番号: 40207064

(2) 研究分担者 なし

(3)連携研究者

- ・ 谷 正人 (TANI Masato)
神戸学院大学 人文学部講師
研究者番号：20449622

(4) 研究協力者

- ・ 小柴はるみ (KOSHIBA Harumi)
東海大学名誉教授
- ・ 屋山久美子 (YAYAMA Kumiko)
ヘブライ大学日本語学科非常勤講師)
- ・ ウメル・マーマツト (MAHMAT Umer)
新疆芸術学院 音楽学部教授